琉球大学学術リポジトリ

沖縄県多良間島における伝統的社会システムの実態と変容に関する総合的研究

メタデータ	言語: 出版者: 高良倉吉 公開日: 2009-03-03 キーワード (Ja): 沖縄県多良間島, 伝統的社会システム, 八月踊り, 琉球, 水納島, スツウプナカ（豊年祭） キーワード (En): Tarama Island, Okinawa Profecture, Traditional society, Dance of August (8-gatsu odori), The Ryukyus, Minna island, Sutsuupunaka(celebration of a full harvest) 作成者: 高良, 倉吉, 池宮, 正治, 山里, 純一, 玉城, 政美, 川平, 成雄, 赤嶺, 政信, 狩俣, 繁久, 大胡, 太郎, Takara, Kurayoshi, Ikemiya, Masaharu, Yamazato, Junichi, Tamaki, Masami, Kabira, Nario, Akamine, Masanobu, Karimata, Shigehisa, Ogo, Taro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9027

学術シンポジウム開催報告

「多良間」を考える－歴史・文化・社会の視点から－

主催：琉球大学法文学部多良間調査委員会／宮古郷土史研究会
後援：沖縄県立図書館宮古分館
会場：沖縄県立図書館宮古分館（平良市）
日時：1999年10月2日（土）　　13：00～18：00

プログラム：

はじめに　　高良倉吉

1．基調報告　（司会　大胡太郎）

①高良倉吉　　多良間の歴史的特質
②狩俣繁久　　多良間の言語的特質
③赤嶺政信　　多良間の文化的特質
④川平成雄　　多良間の社会的特質

2．問題提起　（司会　狩俣繁久）

①大胡太郎
②玉城政美
③池宮正治
④渡久山春好
⑤仲宗根將二

3．討論　（司会　高良倉吉）

おわりに　　仲宗根將二

1．基調報告

基調報告の内容については、本書の各報告を参照してください。

①高良倉吉　多良間島の歴史的特質　ー近世琉球史に係わる二、三の問題からー
②狩俣繁久　多良間島方言の系譜　ー多良間方言を歴史方言学的観点からみるー
③赤嶺政信　多良間の民俗・二題
④川平成雄　近代多良間島の生産　ーその経済史的側面ー

2．問題提起

問題提起　1．「祭祀芸能の新しい記録法」

大 胡 太 郎*

今回は、ビデオ映像による「記録」について、その問題点と可能性について新しい視点から報告します。

音声と記録映像の分野において、多良間の場合は（沖縄全体で考えても）最先端です。とくに『たらまゆう　島のむかしうた』（多良間村古謡収録制作委員会）というビデオが多良間の古謡に関して網羅されています。しかも、祭祀の映像とオーバーラップしたかたちで編集され、古謡に関してもＣＤ－ＲＯＭ化されており、共同体単位で伝承文化を保存しています。このことは、沖縄県全体で見た場合でも、極めて珍しいことです。

今までの音声記録や映像記録の捉え方は、大きく二つに分けることができます。一つは、研究者が研究資料として必要箇所を記録する場合ですが、これは社会に還元（利用）されることは少ないです。もう一つは、記録映像が作品化していくという現象です。つまり、祭のドキュメントや若干のフィクションを交えた作品的な記録映像を指します。私どもの調査で映像として残したものはスツウプナカと八月踊ですが、今までの多良間島に関する映像記録はこれとは違ったものが主でした。たとえば、TV などで放映される映像は、祭のほんの一部であって、全体を見回すことができないために研究資料として利用しにくいという欠点を含んでおり、その全体を見ることはできない場合が多いのです。今回の調査では、祭を最初から最後まで２台のビデオカメラ（デジタルと家庭用）で撮影するということを心がけました。カメラを２台使用した理由は、いずれかのビデオテープの切れ目を補うだ

* おおご　たろう　琉球大学法文学部助教授

けでなく、角度による限定を片方で補いつつ良い方を選択し編集することができるからです。ビデオ映像は、音も再現できるため、音声の宝庫である多良間島にとって有効ではないでしょうか。

次に、採録したビデオから我々は何を考えることができるのか、どのような意味を持ち得るのかという問題を、伝承資料としてのスツウプナカの「ゆなおれが」の映像を比較して考えてみます。

我々が多良間島でスツウプナカを撮影したのは、1998年6月15日で、第1～4祭場までの同時進行的な資料で、微妙な違いが確認できます（特に第4祭場）。また、1999年6月9日に撮影した平良市の高野集落（水納島から宮古島に移住してきた人々の移住地）でのスツウプナカの「ゆなおれが」の歌では、多良間島のそれと比較して節のズレや立つ位置の違いなどが確認できます。このように生じているズレから読み取れる結果は非常に大きいと言えます。さらに、1987年に琉球大学玉城政美氏の調査グループによって採録された多良間島スツウプナカの第一祭場の「ゆなおれが」の映像ですが、アナログであり、音が確認しづらくなっています。第1祭場のものをとりあげて比較してみましょう。

～以下、映像。約10分～

映像による記録は、その時点でのその場所の固有性の証明という点を持っており、一方で、複数の映像を連続的に並べて比較することでバリエーションの生まれるシステムが見え隠れしているということがわかりますし、さらに、通時的に見ていくことができるという利点もあり、さまざまな変化（歌詞や所作の変化など）や法則性が確認できます。また、ツカサとの関係等も検討を要するという点を加えて問題提起として挙げておきたいと思います。

問題提起 2.

玉城政美*

多良間にはたくさんの歌が伝承されていますが、八月踊りの歌以外にも60数曲ぐらいの歌がありまして、実際に歌い継がれる形で資料が保存されている地域は他に見当たりません。このようにたくさんの歌がある中で、特に神歌がどのような状況の下で歌われるのかということが私の問題意識であります。具体的にいえばまず、歌を歌う人にどういう資格があるかということです。神役の人でない人が中心になって歌ったりしています。

* たまき　まさみ　琉球大学法文学部教授

また、御嶽などの聖域で行うといった場所の限定など、厳しい制約があります。これは一般に歌われる物語歌にはないことです。スツウプナカの時に歌われるニーリ（神歌）は村境などの境界的な所に祭場を設置して、聖域化した空間の中で歌われます。それ以外にも今はなくなっていますが、文献に残っている杵搗き歌といって、お祝いの前の晩などに女性が杵搗きをしながら歌う歌や、狩俣のウヤガンの歌などに、杵搗きの場や、人目にさらされないような場所で行うといった場所的な制約があるのはどうしてだろうかということを問題提起として挙げます。

それと、もう一つは、スツウプナカも含めて、多良間では儀礼の担い手としてツカサである女性よりも男性が表だって取り仕切っており、これは沖縄本島で儀式を執行するのが女性と決まっているのと違っています。昔はツカサも行っていたようですが、今は行っていません。この男性祭祀集団というものがどうして起こったかということも議論してみたいと思います。

問題提起 3.

池 宮 正 治

わたしは今の組踊を見て近世ではどうだったのかということを考えてみたいのです。多良間の八月踊りの中に踊りや組踊があるわけですけれども、ご存じのように多良間には組踊の写本が3冊ございます。多良間のふるさと民俗学習館に「忠臣仲宗根豊見親組」と「忠孝婦人村原組」、それから「多田名組」の3冊ですが、組踊が入っています。いろいろとありようが面白いのでその点だけをお話ししたいと思います。

「組」というのが重いんですね。沖縄全体からいうと珍しい。「御双紙組」など、あることはあるんですけれども、全体を括ることはなく、多良間にはたくさんあるのが気になります。それは、いつから組踊と呼ぶようになったかということと関係があるんです。組踊という言葉は1799年以降といわれています。それ以前に組踊という言葉をこれまで見たことがありません。ですから玉城朝薫が何といったのかもわからないわけです。直後の資料をヤマトグチで書いてあって、「狂言」です。歌舞伎とか浄瑠璃をひっくるめた芝居、そういう意味の狂言に当たります。これをウチナーンチュは「踊」と呼んできたわけです。「踊」と「組踊」の割合は演目に換算すると一対一ですが、時間に換算すると一対十ぐらいになり、「組踊」のほうが圧倒的に多いです。それでもそれは「踊」といいます。そのこととさきほどの「～組」というのが関係あるのでしょう。「踊」の中の、何人かでチームを作ってしかできない「踊」が「組踊」であって、それがのちにいわゆる「組踊」になっていくのではないかというのを感じさせる言葉が、末尾に「～組」と付ける多良間の「組」だと感じています。

「仲宗根豊見親組」は中国年号で光緒15（明治22）年、「多田名組」は光緒19（明治26）年（の成立）となっています。（一方中央の芸能としての）「手水の縁」（平敷屋朝敏が書いたことになっていますが私はそうでないと思っています）は、いつから上演が始まったかということはわかりませんが、写本は現存する沖縄で一番古い写本で、内容的にも古いものです。

ところで、王府で多くの芸能が上演されたということは知られていますが、なにを上演したかというのがわかりません。私の知るところでは「寅の御冠船」といって最後の御冠船を那覇（天子館横）でやります。注目点は「忠孝婦人」には「着付」と呼ばれる登場人物のコスチュームが付いており、こういった台本は素晴しい台本で、一般にはそうありません。これが付いているのは格式が高い資料です。多良間の「忠孝婦人」は王府の着付けではなく、「御殿殿内」にある着付けですが、例えば、女性は紅型を着ます。御冠船芸能では紅型を着ることはなく、「ぶんかく」という衣装を着ます。この違い自体がおもしろいのです。

また、「仲宗根豊見親組」のように宮古、八重山といった地元に題材をとるのはほかに例がないことです。この「仲宗根豊見親組」を、なぜ、誰が、どのようにつくったか、知っていらっしゃる方に教えていただきたい。一般的に沖縄の人が作った可能性が高いといわれています。劇をその土地の言葉で作るということはなかなかないんです。ですから、この「仲宗根豊見親組」は興味深いものなんです。

この演じられた内容も気になります。「仲宗根豊見親」というのは沖縄本島では按司クラスになるのではないかと思うのですが、中では大主と言っています。多良間の土原系の人たちは「村の豊見親」といっており、ずいぶんランクが落ちています。かねてからの考えと違っておりまして、按司の下の大主が若按司を追いたてて仇討ちをする、ということになっています。

こちら（の絵）が「伏山敵討」といいます。これは明治のころの絵ですが、こちらが「姉妹敵討」で結構人気のあった演目ですが、今ではほとんど演じられません。これは鎧兜で、沖縄の北部あたりの組踊にも出てきますが、いわゆる大鎧といって鉄砲が出てくる前の格好をしています。これが組踊の中での仇討ちのスタイルで、那覇では忘れられてしまい上演はされていません。女性二人が髪をばらばらにして「大口袴」を着て仇討ちをしている場面ですが、こういうスタイルをむしろ沖縄の方が忘れ、多良間の方が古い形で保存しています。つまり、ここから近世の組踊りも見えてくるのではないかと。

ここにも花笠踊がでてきますが、いつああいう花笠になったのか、あるいは花笠でないのか。資料にでてくる花笠はあれではありません。あの花笠が出てくるのは私の知る限りでは明治以降です。それ以前にあの花笠に近いものがあったのか、芸能の形態の歴史を見ていても沖縄のものはわかりやすくはありません。中央よりも周辺の方が古い形で伝えている、ということです。そいう意味で多良間の八月踊りは興味深いものがあります。

問題提起 4.

仲宗根將二*

今日は密度の濃い話を聞かせてもらいましたが、私の場合、問題提起というよりも、行きがかり上といいますか、話題提供という程度のことをお話したいとおもいます。

宮古と沖縄本島が公的交渉をもったのは、文献上では1390年です。そのときに宮古から行った人は与那覇勢頭豊見親とよばれる人で、足かけでしょうけれども、3年も言葉が通じなかったそうです。3年後にやっと通じるようになって、中山王の察度に謁見しているわけです。王が喜んで与那覇勢頭豊見親を宮古の首長にしたと書いてあるわけなんですが、与那覇勢頭豊見親は帰って、八重山の首長を伴って改めて朝貢しているとのことのようです。最近の研究の成果は、八重山にも首長とよべるような人がいたのだろうか、いたとすれば、与那覇勢頭豊見親と同じように名前が示されてしかるべきではないか、『球陽』その他の文献にも名前がないので、八重山に与那覇勢頭豊見親クラスの首長が誕生していなかったのではないか、それで、宮古・八重山ともに与那覇勢頭豊見親の影響下にあったとみていいのではないか、というのが最近の研究者の報告にでてきます。わたしもそう思っている一人なんです。

ご存知のとおり1500年、ちょうど来年が500年ですが、八重山のオヤケアカハチらの乱平定のことが首里城正殿の欄干の銘文にあります。たしか1509年の銘文だと思いますけれども。そのとき平定されたのは八重山のオヤケアカハチだと。(首謀者)複数説もあります。ところが、欄干の銘文には、「当国の西南に国あり太平山という」と書いてあるのですね。私どもは、太平山というのは宮古だと思っているわけですけれども。首里城正殿の欄干の銘文を起草するころは、まだ宮古・八重山をひっくるめて太平山といっていたのではないかとも言われています。そういうことから考えても、14世紀の末、与那覇勢頭豊見親が中山に朝貢したということで、八重山の支配者についての、球陽等を起草した当時の王府の修史役人の考え方というのが反映しているとおもわれます。

そのようなことから、少し今の話をつっこんでいきますと、ここに拓本があるわけですが、これは国王頌徳碑の拓本です。、嘉靖元年(1522年)です。それの冒頭にひらがなで「首里おきやかもいかなしの御世にみやこよりち金まるミこしミ玉のわたり申候時のひもん」あとは漢文で「ここに宝剣あり」と続くわけですけれど。これが、嘉靖元年です。

そのまえに、当時のオヤケアカハチらの乱に首里王府軍を先導して参加したのは仲宗根豊見親ですが、その人の息子の時代になって、事実上、お家の断絶状態がおきたとおもうのですね。そういうことで、仲宗根豊見親は、お家の一大事だということで、愛刀の刀と真珠を尚真王に献上することによって、宮古での地位の安堵をえたのではないかとおもい

---

* なかそね　まさじ　宮古郷土史研究会会長

ます。国王頌徳碑に書かれている嘉靖元年ということと、仲宗根豊見親の家に今も残っている18世紀半ばごろに成立した家譜、それがその時代を正確に反映しているかどうかということもありますが、それによると、仲宗根豊見親の四男馬之子が、はじめて平良の大首里大屋子に任命されています。それ以前の宮古はいわゆる豊見親時代で、初めて王府から直接に王府の官職名を貰ったのが第1号だとおもいます。そのことと、国王頌徳碑に書かれている嘉靖元年は同年代であるわけです。刀や宝玉を献上することによって、仲宗根豊見親は、尚真王の臣下であることを宣言することによって一族の安泰をはかったのだろうと考えています。

宮古が八重山を影響下においていたらしいということについては、たとえば、八重山に残っている『慶来慶田城由来記』のなかに宮古の豊見親の命令でたくさんの百姓たちが山に入って建築用材の木を切り出している。さらに、それを3、400人の男女の百姓が麓まで降ろしていく。そういう作業のさなかに豊見親が死んだそうだという情報がはいって、作業に参加していた百姓は運び出していた用材を一斉に放り出して、山小屋にもどって酒盛りをし、歌をうたって一夜を明かしたというのがでてきます。そういうことから、どうやら、この時期までも宮古の豊見親と呼ばれる人が八重山に、この場合は西表なんでしょうが、非常に大きな影響力をもっていたということがわかります。宮古は隆起珊瑚礁の島で、地表を流れる川がありません。同時に土壌が浅くて大木が育ちにくい土地です。そういうところでは、建築用材、造船用材の確保が困難です。おそらく、八重山への影響力をもつということは重要な意味をもっていて、14世紀末の与那覇勢頭豊見親の時代から16世紀初期の仲宗根豊見親の時代にかけて、宮古と八重山は一つの世界だったと思うわけです。たまたま宮古は沖縄本島に近く、地の利をえていて、八重山を影響下においていたのだと思います。

ところで、さきほど狩俣さんの話で多良間と与那国の交換という俗説があって、さっぱり問題にもされないんですが、今日はとても意味のあるようなことになってしまいましたので、それにも少し、ふれておきたいとおもいます。ご存じのように『李朝実録』1477年に与那国島で救助された朝鮮の3人の済州島人が、島ごとにリレー式で那覇を経て帰って行くんですね。そのときに、与那国から西表島、波照間島、新城、黒島、多良間、伊良部、宮古と送られるわけですが、その間の2年5ヶ月ぐらい、与那国には6ヶ月いたそうで、その与那国の見聞に基づいてかなり詳細にかかれています。多良間、伊良部、宮古の島々にそれぞれ1ヶ月ほどいたわけです。言語、衣食住、民俗関係は、どの島も与那国にほぼ同じと書いています。そういうことから、与那国から宮古島までの八つの島々の当時の姿というのが、基本的に変わらない、つまり、どこがどう違うと強いていうほどのことがないくらい共通のものをもっているということなのです。

ただ、ここで気がかりなのが、すでに多くの研究者が指摘しているように、この人たちは石垣島や竹富島に寄っていません。なぜだろうかということで、最近、琉球大学(教育学部)の西里喜行さんが、あの時代の八重山には石垣竹富勢力圏と西表勢力圏とがあったので

はないだろうかという、仮説を展開しておられますけれども、そういう見方からも議論できますし、いい提起のしかただなと私は思っていますが、残念ながら、提起されっぱなしで、未だにまじめに議論されていないように思います。

ともかく、竹富や石垣を別にして、与那国から宮古島の報告からしますと、宮古・八重山は同じで、それぞれに力のつよいのに支配されているというものではなくて、たまたま少し力のあるものがそれぞれの地域(島)にいたのじゃないか、と思うわけです。そこで、与那国と多良間を交換するほどの、どういうことを交換というかわかりませんけれども、政治的に大きな力があって、お互いに交換しましょうといったのでしょうか、そこのところはわかりませんが。その辺のところには、言葉の語弊みたいのもありますので、これ以上のことはいいませんが、ということも話題として出しておきたいと思います。

最後にひとつ。いつも気にしながら、それでも小さなことなので、これまで人に聞くのもかっこわるいかなと思って、自分で文献をあさってもでてこないものですから。さきほどの、高良さんの報告にもありましたが、いい機会だから教えていただこうとおもいます。多良間の辞令書4点の紹介がありました。これは、高良さんがずいぶん以前から辞令書発掘のなかで紹介しているわけですが、私自身が勉強不足で、いまもってさっぱりなのですが、3番目の隆武3年8月28日付けで、仲筋与人が多良間首里大屋子職についたという辞令書があります。実は隆武3年というのは年号上存在しないのです。その年は西暦では1647年ですが、この年は通常、琉球史の中では順治4年というふうにでるわけです。ここで知りたいのは、いったいこの辞令書を公布するとき、どの部署で、どういう手順、形でだしたのか、しかも、羽地朝秀の時代にはいって、宮古・八重山に限っていえば、大首里大屋子と大阿母より下の軽官に対してはもう発給しないことがわかっています。それ以前、いわば、与人以下のクラスにも辞令をだしていたわけですから、これからすると、この軽官にはどういう手順を経て辞令が出されていたのか、いつもこの辺について疑問に思っているところです。年号の変わり目でも、そんなに2年も3年も差は出ないのではないか、せいぜい1年くらいのずれはあってもいいのですが。もちろん、そのとき大陸は明から清にかわる大激動の時代ですから、そっちのほうに原因があるのかなと思わないでもありません。

同時に、宮古では祥雲寺の観音堂のところに経塚があります。西暦でいえば1736年に建立された経塚です。それの表に経呪嶺とかいてあります。裏のほうに「雍正丙辰にこれをたてる」とあります。雍正年間丙辰は雍正14年をさすんです。ところが、雍正14年というのは実際はなくて、乾隆元年になります。ですから、宮古の場合、離島だからこういうことが起きるというのもわからないでもないです。一方で、首里と宮古は年に何回も往復しているのにこんなミスをするのかと本当はおもいますけれども。首里王府自体の段階ではどうなのかと。

軽官の任命辞令が、どういう手順で、どういう部署で出たのか、順治4年が隆武3年というふうにみているということですね。この順治4年は、実は、日こそちがえ、月まで同

じなのですよ。向商氏正統家譜に、第1世朝裔が順治4年8月25日に下地の頭に任命されたという辞令があるんです。多良間に残っている仲筋与人が多良間の首里大屋子になるのは同じ年でありながら、隆武3年と書かれています。同じ多良間に発給された辞令書が順治4年、むこうは隆武3年、しかも、同じ年の同じ月の8月、一方の辞令は8月25日、もう一方の辞令は8月28日と、3日しか違わないのです。そういうことから、辞令書の出し方の手順などが気になるわけです。命がけの航海をしたであろう時代に、王府は宮古の軽官の位置づけをどのようにして掌握していたのでしょうか。

もう一つ、関連して、この向裔氏の家譜にでてくるんですけど、目差にもなりました、与人にもなりましたという年月日がかいてある。正確にかかれていますから、たぶん辞令の写しだとおもいますけれども、最後にきて、ひっかかるのが一つでてきます。首里大屋子になったことになっているのが、「年数久遠にして勤職不詳」なのです。たとえば、なんとか筆者にもなりました、目差にもなりました、与人にもなりました、と並んでいるのに、なぜ最後の一行になって、しかも、最後の勤職であろうと思われる首里大屋子になったとしながら、遠い昔のことなのでいつなったのか分かりませんというようなのがいくつも出てきます。まあ、最後の辞令書が失われてしまったので、書けなかったんだといわれれば、それまでです。この一番高位のクラスについては一番最後の大事な辞令書だけが失われているということがちょっとひっかかってしまいます。こんなことは、どういう場合におきるのか、ということです。

ただの話題提供という程度のお話をしました。

問題提起 5.

渡久山春好*

これまでの基調報告を踏まえ、本報告では三点についての問題提起を行いたいとおもいます。それでいろいろご教授いただければ幸いです。

第1点目は、多良間島が宮古になったのはいつなのかということです。多良間島に人が居住するようになった時期は定かではないが、考古学的にみれば先史時代の貝塚、14、5世紀の集落跡あるいは、遺物の散布地が確認されています。そのなかで、磨製石斧やたたき石などの石器や、14、5世紀のものとみられる土器・陶器・磁器、ならびに、600年代や700年代の中国の貨幣などが採集されています。また、3500年前のものとされる下田原土器が出土しています。いずれにしても、人々がいつどこからきて、定住しはじめたのかはわかりません。

島には多くの伝承がありますが、なかでも、史実につながるのは、自然井戸を中心に集

* とくやま　しゅんこう　多良間村立ふるさと民俗資料館館長

落が散在しており、それぞれにリーダーがいて相争っていたのを、15世紀末に土原ヲソロによって諸勢力が統一され、集落が現在位置に統合されたという伝承があります。先ほど、狩俣先生や仲宗根先生からもお話がありましたが、かつて、多良間は八重山で、与那国は宮古であったが、交換されたという言い伝えがあります。しかし、これを実証するものはないと考えますが、私も直接（この伝承を）きいたことがあります。

一方、朝鮮済州島民の漂流から、およそ20年後の1497年に多良間の人が十人で琉球(沖縄)に紅花をもって貢納にいった帰りに漂流したという記録があります。そのことから、非公式に琉球との交流をもっていたのではないか、ということもかんがえられます。それは、土原殿が多良間島主に任命され、豊見親の称号をうけて、統治する以前のことです。また、なぜ、宮古をとおりこして、琉球に貢納にいったのか、当時、宮古の勢力下にはなかったのか、それが、疑問として残されております。

２点目は、明和の大津波のあとの飢饉が究極にいたったのは、多良間ばかりのことか、ということです。

それにつきまして、明和の大津波の被害状況がおおむね公開されて、特に、人命損失については数字的にも知られています。また、その後、大飢饉になったことも知られています。最近出ている資料によりますと、多良間島は大津波以後、大飢饉となり、食べ物はまったくなく、400 人余りが宮古島にわたって、かえりの船便に飢饉米を積んできて、ひとり一日に１合５勺ずつ配分した。しかし、２度の台風で、サツマイモの蔓が枯れ、１日１合に減らし、木の葉を混ぜてたべたが、餓死者が毎日４、５人もでて、合計150人余が亡くなったようである。餓死しそうになって、親子、妻子と離別し、救助をもとめて、八重山へいくものあり、なお、多人数で救助をもとめて、八重山にいくことが三度におよんでいます。まさに、死の限界線まで迫っていたようです。なぜ、多良間だけがそのような悲惨な状態に追い込まれたのでしょうか。

３点目は、石垣島（平久保村）と、これ「尼南院島」は何とよむのか教えてください。私は「みなみいんじま」と勝手によんでいます。その平久保村と「尼南院島」は同一なのかということですね。

『宮古島旧記』のなかの「宮古島記事」に平久保村の多良間田の由来のことがあります。そこで多良間田のことが簡単にのべられています。島の伝承では、くり船で渡って稲作をしたとか、弁当が暖かいうちに渡ったなどというのも伝わっております。また、ある民家には渡った船の底板が現在もあるといっております。しかし、いつごろから多良間田があるのかについては、記録も伝えもありません。

1530年の漂流記によりますと、多良間の人が７人、稲を刈るために、この島にでかけたところ、強風にみまわれて漂流したとの記録があります。この島が石垣島あるいは平久保村と同一なのか、そうであれば、多良間田は16世紀のころもあったことになります。これが、疑問点の３つ目であります。この３つについて、問題提起として、もうしあげまして、ご教授いただきたいとおもいます。

それから、さきほどのお話で多良間の古謡について、大胡先生と玉城先生がおっしゃっていましたが、多良間の古謡につきましては、一昨年、古歌謡集をつくりました。その古歌謡集をつくる時点で３本柱にしたんです。一つは古歌謡集(本)をつくる。もう一つはＣＤをつくる。さらにもう一つは、その古歌謡のなかの３分の１ぐらいの曲をのせたビデオをつくる、これらを３本柱にしたわけです。そのビデオテープと古歌謡集を村の予算で作って、全家庭に無償でくばりました。そして、ＣＤは、村の保存用と沖縄本島にいる多良間の伝統文化愛好会に用意してあります。この古歌謡集はどういうきっかけでできたかといいますと、沖縄にいる多良間郷友会の中の伝統文化愛好会が古歌謡を集録しようといいだしまして、そして、村にその予算を補助をしてくれんかと話がでたんです。たまたま、村では近現代のうた、つまり、運動会の応援歌だとか、校歌だとか、そういったものを収録しようというのが、合致しまして、村史の編集委員長をつとめている私と、そして、むこうの伝統文化愛好会の会長が協力して仕事をやりました。

それから、池宮先生のお話に、「忠臣公之組」がでてきておりましたね。多良間の八月踊りは、仲筋では「宮古島主玄雅公」ともいいますが、これを「忠臣仲宗根豊見親組」といっているわけです。仲筋の組踊に「忠孝婦人」もあります。これを「村原組」ともいっているわけです。これは、むこう(沖縄)では「大川敵討」ではないですか。(池宮：はい、そうですね。) 塩川では「忠臣公之組」というのがあるんですよ。これを「八重瀬組」ともいっている。または、「忠臣身替」ともいいます。夕方演じるのは「多田名組」です。

多良間で組踊がはじまったのは、明治の中期からだと、わたしはいっています。なぜかといいますと、台本なしではできませんので。さきほど池宮先生が台本のことをおっしゃっていましたが、仲筋の「忠臣仲宗根玄雅公」、これが光緒15年、明治22年ですね。「忠孝婦人」には記録がありません。そして、塩川の「忠臣公之組」、いわゆる、「八重瀬組」、これは光緒１９年、明治26年ですね。「多田名組」にも記録はありません。伝えによりますと、塩川では、最初に「忠臣公之組」と「手水の縁」をやったといわれています。「手水の縁」は、道光28年(1848年)の写本になっています。わたしの推測では、これは平敷屋朝敏の曾孫がうつしたものだと思っていますが、そこらあたりのこと、ご教授をお願いします。

(文字化：大城涼子・城間有・中所亜紀・仲間恵子)

3．討論

司会（高良倉吉）：基調報告と問題提起をふまえて、そこで述べられたすべてのテーマを議題にはできませんが、多良間の歴史や文化、それらの観点からどう深めていくかという大きな課題が浮かび上がってきたとおもいます。議論に入っていく前にですね、問題提起のなかでの質問、あるいは会場のみなさんのなかでも、これは話しておきたいというのがあるとおもいます。時間が限られていますので、どうしてもここでみんなで議論するために必要な質問に限って受け付けたいとおもいます。

それでは、さきほど渡久山春好先生が熱っぽく語られていましたが、組踊りの問題ですが、渡久山先生、途中で止められたようでしたが、もう少し付け加えることがありましたら。

渡久山春好：もういいです。だいじょうぶです。

司会：では、渡久山先生の「組」の問題で指摘されたことに関しまして、池宮先生いかがでしょうか。

池宮正治：どうも、ありがとうございました。写本３冊のことが話題として出されていましたが、おもしろいと思いましたのは「忠臣仲宗根玄雅公之組」とか「忠臣公之組」で、こういうのは初めてうかがいました。「公」も「組」も似た内容をもっていて、演目を構成する複数の人たちが交わってなにかをやるときにいう言葉で、その一つが「組」になるかもしれないなとおもっております。それが二つくっついているのかなとおもっております。また、もっと情報を集めたいとおもっております。

司会：さきほど仲宗根將二さんから辞令書の問題で質問がありましたので、私の方から手短におかえししておきます。じつは、薩摩以前の古琉球で辞令書がどのように民衆に交付されたか等、その手続きをつたえる実証的なこまかい資料をわたしは持っていません。おそらく、現在残っている断片的な情報と、辞令書の原理に対して、辞令書を実際に書いた書き手の右筆ですかね、それは、それぞれ宮古、八重山で書かれておらず、首里で書かれているのです。そして、原則的には辞令書を受ける人間は、首里なり、那覇なりに宮古から出向いて辞令をうけるというのが考えられるとおもいます。実際は、地元から推薦されて上がってくることが原則だったとおもいます。実際の辞令書の公布というものについての、現場状況の具体的なイメージはないですね。おたずねの隆武３年という年号ですが、この解釈についてはじつは辞令書だけでなく、首

里の王族の玉陵の石棺にもこういう年号を使うのです。基本的にはその年号は終わっているのに、知らずに使いつづけたということもありうるのです。基本的に中国で、清という国ができて、明の一部があちこちのがれて、福建にながれて、自分たちは明の皇帝の後継者であると、名乗っていろいろ抵抗運動やります。南明政権といわれていますが、それに対する琉球の外交的なかかわりがあって、琉球側は完全に満州(清)に寝返っていないという状況を反映した面があったのではないか、という議論に達しています。ですから、宮古、八重山は遠いのでこんな年号が使われたというのではなく、首里でも使われているという事例があります。もし、そのような世の状況が去って、過去にさかのぼって編纂した時期的には「順治」が使われたかのようにしますから、むしろ、隆武何年と使ったほうがリアルタイムの情報だということになるんですね。そのように理解しています。豊見山先生ちょっと補足をおねがいします。

豊見山和行*：今の説明に補足するのですが、明清交代という形で明という国が、北京が陥落して、福建だとか、そういうところにいくと、南明勢力がみえてくる。それに対して外交関係を琉球王朝がどうとるか、北京を陥落させた満州の清王朝にどういう関係をとるか、10年ぐらい両方をにらんだ外交をやってるんですね。ですから、明を捨てて、新しい清朝に付き従うというのでは、相当琉球側も薩摩側も神経を使っていて、結局1670年代前後になってようやく、清朝に仕えるというかたちをとる。ですから、それ以前は、琉球側は基本的には、明朝がもう一度復活してほしいということにかなり期待をよせて、明の年号を使いつづけていたということで、高良さんのおっしゃったように、当時の状況をよく、反映しているとおもいます。

立ったついでにほかのことですが、このシンポジウムの大きなテーマの歴史、文化、社会ということで、わたしが聞いていて感じたのは、おおざっぱにまとめると、多良間と宮古との関係。それから、多良間と八重山との関係。多良間自身の歴史性、文化性、のたぶん三つの局面があるとおもうのですけれども、その意味合いで報告をうかがってたんですが、さきほどの仲宗根さんのコメントでの『慶来慶田城由来記』を私も読んでいて、大変おもしろいとおもったのは、当時、宮古勢力が八重山まで力をのばしていて、わたしは造船のための用材が非常に重要だったのではないかというふうにおもっているのです。船の用材をどう確保するかというのはじつは1700年代までずっとひきずっていて、宮古船を八重山側がずっと作りつづけていく。それも、おそらく、無償で八重山は作っていて、宮古に提供していて、それは負担が重いから、なんとか宮古側でもそれ相応の負担をしてほしいということを王府にずっと要求をしつづける。そういうことが、さかのぼっていくと、どうも、仲宗根豊見親なり、宮古が八重山へ侵略していった、その歴史性をずっとひきずっているのではないか、というこ

---

* とみやま　かずゆき　琉球大学教育学部助教授

とを感じさせるわけです。そのことが、多良間とどうかかわるかということをかんがえると、では、多良間の船はどこで作っていたんだろうか。やはり、八重山のどこかで作るような仕組みになっていたのだろうということを想定しているわけですけれども、そういう島々での自船のような、村や間切が持っている公用船をずっと作り続ける体制というのは宮古、八重山のなかでは、かなり八重山が負担を強いられていたという意味合いからすると、多良間の歴史は深く八重山ともかかわっているのだろうと。複合的にかかわっているのだろうと。言語の問題でも八重山の基層といいますか、そういう両方の祖語という意味からも、単純に分けられない側面があるんだなと、うかがいました。

司会：言語学の方法をつかって、総括的にいえば、多良間方言というのは宮古方言に位置づけるより八重山方言のひとつに位置づけるほうが、言語学的にもはるかに可能性があるというですが、それがどういう歴史的な状況を反映するのかという問題については、難しいものがあると思います。豊見山先生はどうお考えになりますか。

豊見山：ほとんど妄想的ですので、聞き流してください。古琉球の時期にどこまで八重山の文化圏があったのかを確定するときには、やはり、考古学の力が必要ではないかとおもいます。考古学ででてきた土器なりが多良間や八重山とのかかわりで、どう位置づけられるか、文化圏、物の流通圏を区分けしていくなかで、考古学でいう地域性が確定されることが大切だとおもいます。政治的な侵略――宮古は侵略的だったと私はおもっているのですが、私も宮古原人の一人ですのでこういった発言も許されるとおもいますが――宮古が八重山に対して侵略的だということは、生産力の違いなのか、近世を通じて常に八重山より宮古のほうが２倍ぐらいの人口扶養力を持っていて、古琉球までさかのぼったときにも八重山に対する圧力になった原因の一つではないか。今回考古学の立場からの発言があれば、もっと立体的になったのではないかという感じがします。

司会：研究会の先生方の中で狩俣先生がいった、多良間は言語学的には八重山だということについてご意見ありませんか。

岡本恵勝*：民俗学的にいったらね、多良間はもう宮古とだいたい一緒であって、八重山の石垣(島)のいろんな民俗祭祀や宗教というものとは組織的にはまったく相反するところがあって、多良間と八重山はきれるとおもうのです。そのとき、言語とか民俗というものがどのように変容していったかというところからも考えてもらわないといけな

---

* おかもと　けいしょう　宮古郷土史研究会

いのではないかとおもうのです。ただ、過去の先生方が多良間の方言を宮古方言の下位の位置においたということは、大神にしても何にしても、距離的な問題であって、その人々が持っている民俗信仰とか民俗思想とかが宮古にむかっておれば、言語も当然宮古圏内にはいるのではと、私はおもっています。わたしは多良間方言というのは独立した、宮古方言の属島の方言に入るとおもうのですよ。

司会：赤嶺先生、この問題にコメントするとしたら、どうですか？

赤嶺政信：いま、岡本先生がおっしゃられたように、こう、民俗現象としてわれわれが観察できることでいえば、サトゥヌカンとかカカリャンマということばもそうですけれどもウマヌパの方向を重視するというのはまさに宮古的で、八重山的な民俗要素は探しにくい。あえて探すといえば、司の継承で、宮古ではほとんどくじ引きで決めているのを、多良間では家系であったというぐらいで、全体的には、やっぱり岡本先生がおっしゃるように宮古的なのではないかとおもいます。

司会：ほかにどうですか。研究会の先生方で、この問題についてご意見のある方は？　われわれ文献を研究する歴史家としては、仲宗根将二会長がなされたみたいに、薩摩が入ってくる以前、たぶん文献的にイメージできるものとして、宮古と八重山はあんまり差がなくて、ご指摘のように太平山とよばれたり、行政の碑文に宮古・八重山をひとくくりでくくっていたりして。沖縄本島からみると、一つのまとまったグループという形で見られていて、だんだん統治制度が発達してきて近世にその制度が完成するのだとおもいますが、宮古八重山をふたつにわけてしまう。共通の制度と、それから制度運用のなかで元々持っている個性がどうぶつかりあうかという問題があるかとおもいます。文献的にも今のところ多良間島が八重山と宮古の連絡調整役みたいな役割をはたしているのは、それはあきらかに業務としてやっている世界で、文献的にはいまのところ、八重山の圏内だったという情報がないわけです。ですから、狩俣先生の議論というのは非常に孤立した孤独な議論になっているとおもいますが、今後どうやっていくのか決意表明してください。

狩俣：そうですね。データの量を増やしていくということと、実は、この9月に白保の方言を調査したんですけど、白保と波照間と石垣と竹富島を比較していこうかと思っているんです。そうすると、波照間と白保は1790年とか、もっと古ければ1710年ぐらいに分かれますが、波照間と白保が200年の間にこのぐらい変化している。そうすると、竹富と石垣の差はどのくらいか、それに波照間や多良間をいれて、さらに、宮古をいれる。波照間・白保という物差しで計っていったら、方言間の距離がわかるのではないか。白保は石垣方言の影響はあまり受けていない。部分的には受けていますけ

れども、大きくは受けていない。そうすると、波照間と白保の差がこれだけ、ほかの方言の差はこれだけというように距離がはかれるのではないか。まだ、400 語ぐらいしか調べていないんですが、波照間と白保は200年であんまり変わってないですが、ほかの島との差は結構大きいんですね。

ここではあまり強調しなかったのですが、宮古八重山全体の共通性もあるんです。たとえば、発音の変化というのは標準語のｉが宮古でｉに変わって、与那国ではまたｉにもどる。池間でもｉにもどる。また、元に戻るのですけれども、この変化は一定の方向に進んでいくなかでの段階的な相対的なバリエーションの差なんですね。それに対して、「酒は」というのを、サキサ(平良)というのと、サケー(石垣)というのは、逆向きの変化なんです。これは文法にかかわる変化で、全面的なものですから、一つの単語、たとえばミパナ(顔)という一つの単語が変わるというのとは違うんです。文法の違いというのは大きくて、語彙のような借用はないし、ちょっとした人の移動で変わるものでもないとおもいます。こういう変化をみていくと、聞いた印象では多良間方言はかなり宮古方言的なんだけれども、根本的なところでは八重山よりではないかと。しかし、実証のためには多良間と波照間と白保と与那国と石垣というような事例をどんどん増やしていって、単語の数を重ねていくしかないんです。いままでの方言研究者はそういうことをしないで、結論づけていたのではないか、とかんがえていて。

さっき(多良間と与那国の)交換という話をしたんですけれど、交換があったと言うよりは、多良間は距離的にも八重山にちかくて、もし、宮古文化圏と八重山文化圏の二つに分かれるとすると、多良間は八重山文化圏に入っていた。だけど、後の時代に宮古に組み入れられるようになった。その後で、八重山文化圏に属していたことの伝承として、どっかと交換したという、そういう交換が実際にあったと言うよりは、かつては八重山にかなりちかい文化圏にあったものが、宮古にくみこまれていくなかで、伝承のプロセスとして変容していったのではないかというのが僕の考えで。さきほど、新城島の方言が宮古島に近いといいましたが、それは印象のレベルの問題で、文法とか単語のレベルになると、どうみても八重山なんですよね。

赤嶺：懇親会で話してもいいのですが、狩俣さんに、すこし、エールをおくるという意味で、すこし、エピソードを紹介します。鳩間島出身の大城学さんという芸能研究家がおられますが、彼と話していましたら、彼がスツウプナカかなにかで、多良間をたずねて、で、彼は酒をのみすぎて朝おそかったそうです、旅館で。そしたら、おばさんたちが、この沖縄からきた人たちは、酒ばかり飲んで寝ているという話を多良間方言でしていたら、その鳩間出身の学さんはほとんど意味がわかったそうです。

司会：仲宗根会長と、それから、狩俣先生がだされた問題は、僕は歴史家さんとしてもお

もしろい論点として考えているんですが、太平山、宮古八重山全体をふくめて総括的にあつかわれた時期があって、もしかしたら、多良間は生活上の交流とかそういうのをふくめて、かなり、石垣島とか八重山的な文化というか生活状況が形成されていて、だんだん古琉球のある時期から制度が強化、再編成、構築された段階で宮古の行政区に編成されていく。それが、実体化される。つまり、我々は宮古八重山を分けて考えるけれども、そういう発想はやめて、もっとダイナミックに多良間の位置づけを考える。多良間の位置づけということは、つまり、宮古八重山のイメージがどのように変化してきたか、という問題と深く関わってくるとおもうのです。それは始まったばかりで、結論は出せませんけれども、言語学の方から出してくる問題とつながってくる問題ではないかと考えます。

それから、さきほど渡久山先生からだされた問題は大事で、八重山で、例えば新城の人間が南風見あたりに水田を作りに船で通うとか、鳩間の人間が上原あたりに通うとかですね。八重山では多いのですが、もちろん池間の人が伊良部島に畑をひらいたりしているところがあると、つまり、海を越えて水田や畑の耕作に通うと。沖縄本島でも本部半島の人間が瀬底島に通うとか、いろんな例があるわけです。それが、基本的にはいつからか、という問題がよくわかっていません。ふつう、八重山の場合は人頭税というのが強化されて以降の、近世以降の問題だとかんがえられていますが、「多良間田」伝説というのが、もし以前から存在するのだとすると、再び人頭税の問題だけとはかぎらない、大きな問題に発展する可能性があるわけです。

佐渡山正吉*：狩俣先生のお話を聞きまして、すごいなとおもいました。なにがすごいかというと、宮古の範囲内にあって、多良間は言語、文化、政治のしくみ、すべて、私は宮古だとおもっていたんですけれども、言葉は文化の基層をなすという、私はこの(ことばの)視点から多良間をみるというのはこれはすばらしい発見だとおもって、さきほどから非常に勉強になっております。じゃあ、より八重山寄りだとご指摘なさっているとすると、赤嶺先生のサトゥウタキとか、あるいは南の方位に対する信仰、あるいはまた、トゥクルヌカン、そういう民俗信仰の視点でみると、明らかに宮古ということになるのですか。その二つを視点を変えてみようと。地元の伝承と、また、実際にその地名としてのこっている多良間田の問題を絡めて、わたしの意見を申しあげたいとおもいます。この、多良間田という地名が、実際にあるわけですから、多良間の人たちが渡って，稲作をしたと。これはもう事実とみていいのではとわたしはおもいます。だから、多良間の人たちが定期的に、その耕作時期になるとあらわれると。多良間から石垣はみえるし、石垣から多良間はみえるし、多良間にはヤーマドゥーミ（八重山遠見）というのがあって、八重山は指呼のあいだにある。そういう距離ですから、

* さどやま　せいきち　宮古郷土史研究会

多良間との親近感というのは、距離からみても非常に近かったとおもいます。多良間から行ったから「多良間田」が生まれたとするが、これを逆にして、八重山の方が多良間に移り住んだと考えたらどうでしょうか。そして、非常に大勢いたから、母語としてこれを使用するようになったと、ある程度の人数がいなければ、言葉というのは、島には定着しないわけですから。その方々は、多良間の言語の基礎を作ったとおもわれる方々は石垣島から渡ってきたと。

そういう風にしてみると、多良間は畑作です。100 パーセントね。八重山から渡ってきた方々が米の、おいしい飯をもう一度喰いたいと、あるいは、普段の食材というよりも、祭祀用につかわれたとも思うのです。そういう見方をしたら、そして、赤嶺先生が指摘なさった宮古的な民俗風習というのは後から、政治的に宮古に組み入れられるようになってから、民俗的ないろんな信仰とかあとからついてきたと、いう見方はどうですか？

狩俣：あの、人が移っていったというのはあまり考えてないのですけれども、可能性としてはあってもいいかなと。ただ、今日のシンポジウムに考古学の人がいないというのがなんといっても残念なんです。考古学の下地和宏*さんがいてくれればとおもいます。言語学の観点からいままでは問題にはならなかった多良間方言の位置づけを、こういう風に過激に発言することによって、宮古八重山の方言をもっと近づけて、宮古の研究者は宮古の方言を、八重山の研究者は八重山の方言を研究していて、お互いがそれぞれを視野に入れないまま、多良間方言を位置づけてしまっていたのを、こういう風にみることによって、宮古八重山方言を統一的にみながら、多良間方言を理解する。また、そのことを通して、宮古八重山全体の方言がどうなっているのか考えたいとおもったんです。そして、もう一つは、宮古八重山の人たちが、いつからいまの方言をしゃべるようになったかという、大きい問題がありまして、そこまでいくと、こんな風に(眉に唾をつけたり)しないといけないのですが、やっぱりそういう問題になる。いつからこんな日本語のバリエーションというか、琉球方言の「目」はミーといい、「手」はティーという、これはどうみても大和口とつながっている言葉なんですけれども、それをいつから、宮古八重山の人たちはしゃべるようになったのか、という問題提起をし、かつ、周りの考古学やら、民俗学やらいろんな人たちから話を聞いて、これからもっと深めたいというのが本当のところなんです。ただ、言語学的には自分の意見に自信はあるんです。

佐渡山：方言で「顔」は「ミパナ」ですけれども、「ウムティ」というのもあります。顔つきが暗いな、暗い顔つきだなというのに「ウムティ　ッフむ」と、面が黒い、顔がく

---

* しもじ　かずひろ　城辺町編纂室

ろいという、そういうことばもあります。「ミパナ」と「ウムティ」はどちらも使われています。

狩俣：言語学でいうと、たとえば「頭」とか「顔」というのは結構変化があって、日本語でも「かしら」とか「こうべ」とか、いろんないいかたがあって、「手」とか「目」とか「鼻」というのはほとんど変わらないです。おなじ基礎語彙でもあんまりかわらない。ようするに、千年、２千年変わらない単語と、短い周期で変わる単語があるわけです。だから、ミパナというのは変わるほうの単語で、手というのはあまり変わらない単語なんです。あるいは農作物で商品になるものは、たとえば、「たばこ」は日本中、世界中、「タバコ」のバリエーションがありますが、「ヨモギ」商品になりにくいから、もうすこしバリエーションがおおきいとか。単語によって変化の具合に差があるので、単語を一律に考えるのではなくて、一つ一つの単語の差とか、来歴とか、それが、たとえば、「ヤツウサ」というのは、「ヤイトグサ(灸草)」の変化した形だと僕はおもうんですけれども、「灸」というのは日本語でいつできたのか、灸というからにはその用途をしってる。そして、そういうのはいつからなされるようになったのか。その、言葉の語源そのものも探っていくということをやっていけば、かなりの正確さでわかってくるんじゃないのかなと。ただ、僕自身がこういう研究を最近はじめたばっかりで、これまではもっぱら発音の研究ばっかりやっていて、歴史学の高良先生たちと同じ専攻になって、こういうディスカッションができるようになって、ようやく入り口にきたというところなので、今後の課題ということにしたいと思います。

佐渡山：あと一つ、川平先生にお願いしたいことがあります。多良間における畜産について、いろいろ資料をおっていただきましたが。おうかがいしたいのは、多良間島にかぎらず、宮古島でも歴史資料を見る限り馬の頭数と牛の頭数は、ただ(少し)の差だけれども、ある時代から、勢力争いの引き出物など、あるいは、賠償、保証とかにもさかんに牛は登場しますけれども、馬はでてこないです。だから、馬は徴用としてのみ２、３出てくるんであって、すべて、生産にかかわるもの、あるいは、社会的な貨幣のかわりになる、流通の価値のあるものとしては、牛の比重が大きいわけです。ところが、大交易時代に中国に対しては、沖縄全体で馬をどんどん出していますよね。対外的な交易に馬は一つの目玉として脚光をあびている。そして、宮古からも宮古馬がどんどん出されているという状況があります。そして、沖縄県史の民俗編の資料の中に公用馬は宮古馬だと。兵馬は宮古馬と限定していたという風な記述もきいたおぼえがあるんですよ。宮古馬はかなりの比重で扱われていたとおもわれるのに、これは極端にすくない。これは多良間にかぎらず、宮古島でもそのような現象ですけれども。古琉球における馬と牛の関わり、生活や生産等に関して教えていただきたい。

川平：牛と馬を比べてみて、どうして極端に馬が少ないのか。宮古島でもそうなんですね。実は、会場にいる皆さんにおうかがいしたいことなんです。古琉球の時もそうだったかもしれないけれども、近代以降でも極端に馬が少ない状況があるわけです。ところが、在来式製糖工場では牛や馬を利用して製糖するわけですが、搾汁のときはほとんど馬が使われているわけですね。そこがわたしにはわからない。皆さんに教えていただきたいと思っていたところです。

池宮：あの、沖縄からは関西にたくさんの牛が特産品として売られています。だから、県内では牛は輸出関係で出てきていて、使役ではありません。近世は別で、牛が多いけれども、これは牛肥を納めなきゃいけないもので。この場でうかがいたいのは、牛を召し上がったかどうかですね。

佐渡山：牛はたべてないです。また、禁止されてます。牛はたべてはならない。

赤嶺：牛を殺した際、肝臓、あるいは心臓をゆがいて、塩をふり、皿に盛って小屋の隅にそなえ、マキガミの最初の祈願にした。多良間村史によると、これはタツノカムとのいうということですが、僕は牧だとおもうんですけれども。マキノカミ(牧の神)ということで、牛を殺したということは、食べるつもりで殺したんだろうとぼくは勝手に考えているのですが、肝臓あるいは心臓をゆがいて、牛小屋か馬小屋で、マキノカミに儀礼をしたと、わたしは聞いたのですが、その、マキノカミはタツノカムともいう。このことについてなにか。

渡久山：屋敷神というのがあるでしょ。その場合、豚小屋にも牛小屋にもあるんですね。神様をまつるというものなんですよ。

川平：あの、渡久山先生、その場合、牛が多かったのでしょうか。

渡久山：牛も飼っている家もありましたね。

司会：あの、牛と馬の話ですけどね。ぼくは皆さんが経験なさったこととか、先輩方から聞いた生活状況と、近世の史料からみるのとは、たぶん意味が違うとおもうのです。僕は宮古八重山から馬が少なくなったのはいつからかということを考えていまして、逆に近世の史料の宮古島の「規模帳」をみましても、ちゃんと、宮古には馬牧があって、ちゃんと馬に関するリストが作られていまして、逆に言うと、かなりの馬が飼育されています。宮古と八重山の統計からみてみますと、八重山の方も馬が結構いる。ですから、過去の状況といまと違うとおもうのです。ただ、沖縄本島で問題になって

おりますが、グスクを考古学の人たちが掘ると、馬の骨はほとんどでてこない。ここは牛の骨です。それからもう一つはシマクサラシですか？　肉をぶらさげて邪をはらう儀礼がありますが、そういうのに牛の肉をつかう。

赤嶺：基本的には牛の肉ですけれども。宮古八重山にもあります。沖縄本島に関していうと、昔は牛だったけれども、牛から豚にかわっていく。

渡久山：豚ですね。村の入り口に大きな骨を吊るして。

司会：18 世紀に、浜に馬を連れていって、馬を喧嘩させる。闘馬みたいのをやっちゃいけないという。宮古の規模帳にあるんですね。

渡久山：浜にいって、馬を喧嘩させるという行事があったみたいですね。

佐渡山：闘馬は明治の終り頃まであって、最後まで残ったのは伊良部島じゃないかとおもうのですけれども、あまりにも残酷だということで。

上田長福*：70 年前ぐらい前わたしたちが小学校時代に部落の入り口にそういうふうに豚の骨をぶらさげて、悪い人が部落内に入らないような祈願をするということをきいたおぼえがあるのですよ。それから、先生方におねがいしたいことですね。城辺町に皆粉地という部落があります。そこに、多良間御嶽というのがあるんですよ。ここの先祖がこの部落では一カ年に７、８回くらい祈願をしていたのですよ。いまはもう、そういう人がおらんから、若い連中の世代になって、その部落でいまはアーブーず（粟穂祭）、ムギブーず（麦穂祭）ぐらいしかやっていないというのですね。昭和 17 年頃に聞いたら、当時そこを信仰していた方たちは多良間の人たちで、明和の津波でここに漂流してきたそうです。そうして、暴風もくるから、多良間にはもう行くなと、家族もおれば、家族も（ここに）呼べというふうに話をした。多良間に家族が５人おったそうです。御嶽のところに掘建て小屋をつくったという話があった。その子孫がいるかどうかとたずねたら、わからんという。失礼ですが先生方調べてください。

豊見山：川平先生に質問と、それから、多良間の方にもお伺いしたいのですが、表 21（本書 26 頁）の水産物のところにナマコが出ているのですが、1906（明 39）年だけ出て、ほかの時代はでていないのはどういう意味があるのかということと、多良間の方はナマコを食べたことがあるのかということです。これは食するためのものだとおもうの

---

* うえだ　ちょうふく　城辺町古謡伝承者

ですが、そういうお話なり、言い伝えがありましたら。

川平：報告のなかでも話したのですけれども、表21の水産物に関しては、もう少し深めたいというのも私の今後の課題です。

岡本：あの、大神島では食べていますよね。池間は輸出用に、干して乾燥させて。

佐渡山：川平先生の資料の多良間の水産物のナマコは輸出用だとおもうのです。というのは、あの頃は、フカヒレも盛んに出されています。フカヒレが高価で取引されたそうです。ナマコも天日乾燥したそうです。もし、食材としてずっとメニューにはいっているなら、少なくても量としては継続的に表にあがってくるとおもいます。ある時期だけにぽっと出て、消えるというのは、取引の問題もあるのでは、と。

司会：すいません。時間があと10分しかないですので、まだ発言してらっしゃらない方がいらっしゃれば、どうしても質問したいというかたがいれば。

岡本：素朴な質問なんですけれども、どうして多良間は沖縄文化の影響が強いのか、沖縄文化に影響されているから八月踊りも入ってくるのか。沖縄文化が凝縮しているところが多良間の文化で、宮古本島を通り抜けて、沖縄文化とつながりがある。それから、もう一つそれと関わって、平敷屋朝敏の子孫がいるから、多良間の文化は非常に高いとか、いろんなことを教えて文化を深めたというふうに、つねにそういう技術はあったとおもいますけど、なぜ多良間島に沖縄の文化があるのか。そういうのを教えてほしいのです。それから、多良間の人がもっている自分たちの文化に誇りを持っている、文化のレベルが高いのだというような意識。それから、もうひとつ、多良間から宮古にいくとか、そういうのが池間からも有るわけです。伊良部からもある。「宮古」ということばはというのはどういう意識からでているか、この意識はどういうところからでているのか。

司会：岡本先生の提起された問題は大変重いもので、深く議論しなければならないのですが、池宮先生がだされた八月踊りで出される沖縄風の芸能ですよね。それの歴史的な意味みたいのを池宮先生にコメントしてもらって、そして、渡久山先生にも短く。

池宮：もともと、組踊りというのと、いまやっている古典系の踊りというのが中央でできあがる時期があるのです。それが、沖縄本島でも次第に農村にも普及していきまして、1700年代のおわりごろまでは、だいたいシチガツ(七月)といいまして、おきなわではネンブツ(念仏)というのですけれども、その時期にエイサーを踊るのですね。舞台を

つくって那覇のど真ん中でもやります。そういう舞台があります。それがしだいに全琉的に八月に移行しているわけです。奄美も同じで、もともと八月にあるわけではなくて、もともとは七月芸能。だから、多良間がどういう記録を残しているかわかりませんが、いま明治以降じゃないかということをおっしゃっていたので、そうかもしれないという感じがするのです。そんなに古くはない。八月芸能になったのは、1800年代以降ではないかという感じがいたします。そういう意味では全琉的であって、平良がうけいれてないということではなくて、本来は士族層が組踊りをしっていれば、仲宗根豊見親組なんかそうなんですけれども、それは、平良の要請で作っているはずであって、多良間の要請ではないですね。三線が入ったり、琉歌が入ったり、それが、いまはみごとにないという感じがするのであって、古くいくと、近世のレベルにいくと、どうだったのか、というのはこれからの問題ではという感じがします。

司会：渡久山先生の感じていることを、文化的な背景みたいなものについて思われていること、宮古のなかでも多良間の意識はこうだというのがありましたら。

渡久山：多良間はあちらこちらから、政治犯、思想犯が流されてきて、そういう人の子孫が多いので、多良間の人はじつは良いそうです。私が調べた範囲では、そういう有識者というのは、座喜味親方、平敷屋朝敏、そのほかいろいろ多いです。あの、余談になりますけれども９月４日に那覇で講演をしてくれと、よばれたのです。そんときも、なぜ、宮古本島にはない踊りが多良間にはあるかと。多良間の人々も不思議におもっている。「仲宗根豊見親組」というのがありますね。いまは多良間にしかないんですね。沖縄のどこにもない。それでもあの場面は８割までは宮古です。宮古島の地形から何からわかっていないと書けない。それで、多良間にだけしかないといっても、多良間の人が書いたのではなくて、たぶん多良間に関することは多良間にいた人が最後にアップしただけで、あとは宮古島ですから、もしかしたら、役人が何回も多良間にいった例があって、20数回も渡っているという人は何人もいる。そうして、多良間の事情にも詳しい。そういった人が書いたのではないだろうかと私は思うのです。多良間でならば、明治24年ならば多良間は学校もできておりますから、どこの人が書いたというのは伝わりそうなものですが、全然わかりません。

司会：いまの渡久山先生がだされた問題ですが、わたしも個人的に関心を持っているテーマですが、たくさんの問題をふくんでいるので、これは、２次会の方でということで、最後に、ひとり、藤江さんがわざわざ横浜からきていますので、ひとこと。

藤江：水納島の状況についてですが、さきほど、多良間と宮古、多良間と八重山というテーマで議論していたときに、私が考えていたのは、水納島と多良間島の一体感の問題

です。最初に高良先生の発表のなかで、近世の役人が多良間という行政地区に配属されたときに多良間首里大屋子、塩川与人、多良間目差、水納目差という、この人の組み合わせに対して、とても不思議な印象をうけたんです。現在私たちが考えるときに多良間島と水納島という組み合わせ、あるいは、塩川村、仲筋村、水納村という組み合わせのどちらかになります。このことが歴史的な背景のなかで、水納島が多良間のなかでどのように位置づけられたのか。それで、多良間島というのは土原豊見親によって統一されて大きな展開を迎えます。そのなかにあって水納島についてはひっかかることがあって、あの、多良間島に大きな御嶽が6カ所あるのですが、その中でも運城御嶽や泊御嶽といった土原豊見親系の由来の拝所というのが、島の中でも高く位置づけられている。渡久山先生からうかがった話では、時代的な古さみたいのがあって、それではかっていらっしゃると。それが運城(御嶽)、泊(御嶽)という順になって、それが祭のなかの司の席順に反映されているということでした。それで、水納島というのはどうなのかとおもったときに、水納の御嶽(水納神社)というのが、水納ペーユヌスという土原豊見親が統一する際に手助けをした人物を祀っているという意味では土原豊見親系に組み込まれている。わたしが『雍正旧記』をみたときに、水納御嶽に関する水納ペーユヌスを由来としない五穀発祥の地であるという、土原豊見親にかかわらないというのを見たことがあったので、そのこともふくめまして、「多良間」における水納島の位置づけみたいなのをお聞きしたいなとおもっています。

司会:「多良間」といっているけれども、多良間の中には水納島がある。水納島を含めて多良間をどうかんがえるかを提起していて、非常に大事な問題でありまして、むしろ、しばしば水納島をはずして、忘れてしまって、議論するばあいもあるのですが、大事な問題です。これは時間の都合上今後に向けての問題提起ということにしましょう。

(文字化:大城涼子・仲間恵子)

多良間研究の成果
4学者が中間報告

学術シンポで意見交換

【宮古】学術シンポジウム「多良間を考える」（主催・琉球大学法文学部多良間調査委員会、宮古郷土史研究会）が二日、県立図書館宮古分館で開かれた。同委員会では歴史、文化、社会の幅広い観点から多良間を研究しようと一九九七年度から三年計画で調査を進めており、中間報告として行われた。

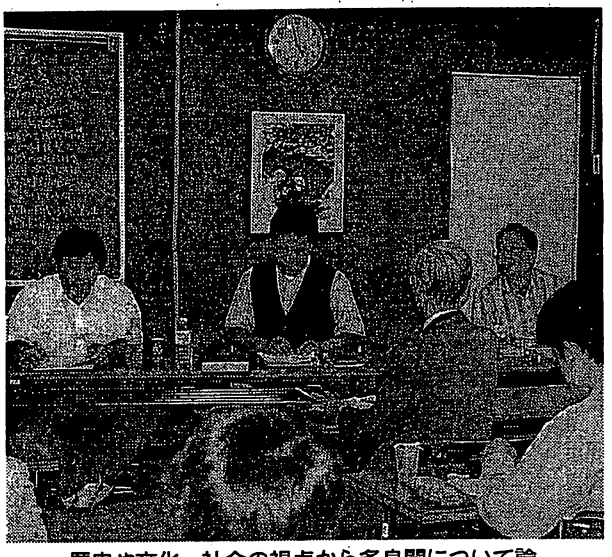
琉球大学法文学部の高良倉吉教授が「歴史的特質」、赤嶺政信教授が「文化的特質」、狩俣繁久助教授が「言語的特質」、川平成雄教授が「社会的特質」の面から発表。約四十人が参加し、問題提起や討論もあり、活発に意見を交わした。

「多良間方言は宮古方言か」をテーマに報告した狩俣助教授は、従来宮古諸方言の下位方言に位置付けられていた多良間方言の区分について、「系統的な関係を重視すれば、八重山方言の下位方言に位置付けるべき」と提起した。

狩俣助教授は宮古、八重山、多良間の各方言の特徴について、発音や文法、語彙（い）の観点から比較。多良間方言は、発音の観点からみると宮古諸方言の特徴に似ているが、形容詞や名詞の曲用、語彙などの面で八重山諸方言に共通する特徴があると指摘。

「多良間方言と八重山諸方言に共通する特徴は古い特徴で、歴史が新しくなるほどに宮古との接触が多くなり、宮古諸方言と共通の特徴を持つようになった」との考えを示した。

高良教授は、多良間島に伝わる辞令書を通して、十七世紀中期から後期にかけて進められた首里王府の改革について説明。地方役人のローテーション制導入などによって変化した多良間島の統治体制について報告した。



歴史や文化、社会の視点から多良間について論議した学術シンポジウム＝県立図書館宮古分館

宮古毎日新聞　1999.10.3（日）　1/2

「多良間は宮古か八重山か」

歴史や言語の視点で「多良間」考える

琉大法学部多良間調査委

4氏が各々の分野で基調報告

歴史・文化・社会の視点から「多良間を考える」シンポジウムが二日、県立図書館宮古分館で開かれた。主催は、琉球大学法文学部多良間調査委員会（高良倉吉会長）と宮古郷土史研究会（仲宗根将二会長）。四人の基調報告の後、「祭祀（し）芸能の新しい記録法」などの問題提起があり、最後は、全体討論となった。「多良間は特別制度下にあった。宮古島と石垣島のほぼ中間にあり、両者の仲介役を担ってきた」（高良）、「多良間方言は宮古より、八重山方言に近い」（狩俣）など、新しい見解が示され、最後の討論では議論沸騰した。

午後一時から二階研修室で開かれた学術シンポジウムには、四十人余が参加して基調報告に耳を傾けた。報告者は高良さんが「歴史的特質」、赤嶺政信さんが「文化的特質」、狩俣繁久さんが「言語的特質」、川平成雄さんが「社会的特質」。それぞれの立場から見解を述べた。

高良会長は「琉大の組織改革で大きく変わり、文系が国際言語文化学科にくくられた。その中で、共通のテーマをみつけ、勉強していこうと三年前、この会ができた。今回は中間発表のつもりで報告する。全体討論では多良間の問題も宮古全体の問題としてディスカッションに加わってほしい」と述べ、報告に入った。

多良間島の歴史的特質
―近世琉球史に係わる二、三の問題から
高良教授

親里家に伝承される四件の辞令書は、十七世紀中期から後期にかけて、この島を含む両先島社会で重大な変化があったことを示唆している。目差・与人はシマ＝村レベルに設置された役人で、その冠頭に付される名称は村の名前でなくてはならないのに「いるゐ筋」・仲筋・水納とあるのは、こうした村が存在したことになる。

また、これらは歴史的に辞令書の発給範囲の限定と役人任用制度の変化を物語っている。国王改革を主導した羽地朝秀は、一六六六年、それまで例外なしに与えられてきた辞令書を限定した。多良間の四件の辞令書は首里大屋子以下の役人に至るまで辞令書を受けることができた時代の最終段階の証拠といえる。

もう一点は、役人任用制度の変化だ。羽地路線のスタッフの一人、恩納安治（佐渡山安治ともいう）が検使として先島に派遣され、行政のあり方を抜本的に改革したことを「恩納親方規模帳」に布達したことがわかっている。その中にこれまで任期不定だった地方官人の任期を三年とすると同時に、満了後に一定の基準で異動する制度としてローテーション体制をとった。

ところが、多良間は、役人の構成などから察しても、特別制度下にあったことがわかる。また、「多良間往復文書控」によると、多良間島が宮古と八重山の中間にあるためか、両者の仲介者の役割を担っていたと思われる。

多良間方言は宮古方言か
狩俣助教授

多良間方言は、これまでほとんどの研究者が宮古諸方言として位置づけてきた。確かに共通点はあるが、違う現象も見られる。同時に八重山諸方言と共通する点が見られる。また、上村幸雄は多良間は距離的には石垣に近い。そのため、八重山方言と類似点が見られる、としている。音韻、文法、語いの面から多良間方言を宮古八重山方言群の中にどう位置づけるか、考えてみたい。

上村は、宮古と八重山方言の違いを次のようにのべている。八重山は、子音とのわたりに摩擦音（s）（z）が挿入されることはあっても多くの方言で宮古方言に比べて調音的にも母音である。そして、両方言は、①豊かな閉音節構造②音節主音的な子音③舌先母音の摩擦音に強さを基準に区分する、としている。

多良間方言と八重山方言に共通する特徴は、両者が分岐する以前から共通に持っていたと思われる。その後、歴史が新しくなるほど、多良間は宮古との接触が頻繁になる中で、宮古諸方言（とりわけ平良方言）の影響を受けていった。

多良間の文化的特質
赤嶺教授

多良間で家の神は、中柱に寝るといわれ、落成三カ月と三年目にムヤーバラ（中柱）を拝む習慣

がある。また、ウマヌパ（午の方角）を神聖な方角とする世界観もおもしろい。うたきの祭し組織は、宮古島や伊良部島が、くじ下ろしで選ぶのに対し、古くはツカサを出す家系があった。ニサイガッサ（二才頭）は士族から選ばれ、日取り主などの重要な役職。

祖先は、仏壇に位牌を設けて供養するが、三十三年忌が終わると、ウブダティとして香炉を別に設ける。里神は、自然神、井戸の神、鍛冶神、島立ての神などがいわれ、うたきの神とは少し性格が異なる。九月に行われるマッツは三日間行われ、中日にカンカカリンマが世振り（口寄せ）をするが、なぜかそこにカビトゥイ（瓶）が置かれる。

近代多良間島の生産―その経済史的側面

川平教授

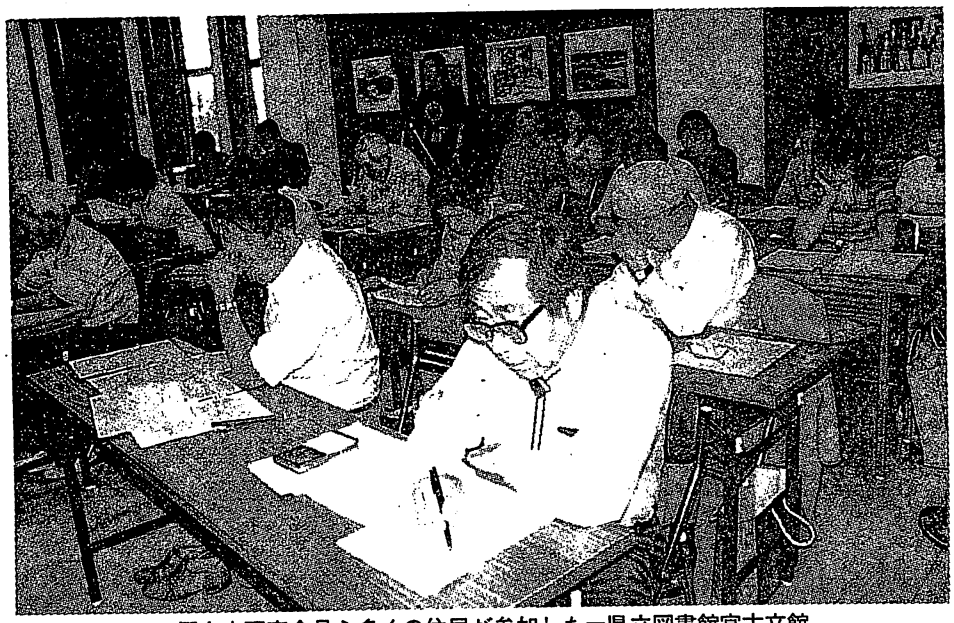
各々の時代に人が動くところから数値資料を分析しながら考えたい。多良間の人たちは、大地、水、息吹に育まれる中で、ものを作り、生活を営んできた。悠久の流れの根底にあるものは何か「沖縄県統計書」を資料に分析する。

農業は、明治のころから男女とも専業が多い。明治二十九年から急に伸びているのは、サトウキビが導入されたことを物語っている。大正四年ころから反収が上がっているのは品種改良によるもの。ところが昭和五年ころ黒糖の生産高が落ち込んだのは、昭和恐慌があった。また、昭和十年から十五年にわたり、生産が減少しているのは戦争のため、かんしょの栽培に振り向けられたから。

農作物のあり様は、大豆、小豆、粟などの穀類を中心に作っていたことがわかる。このほか、宮古上布や泡盛などもつくられている。畜産は牛の数が多く、馬が少ない。

四人の報告のあと、大胡太郎助教授や仲宗根会長、多良間島の渡久山春好さんらから問題提起があり、最後は全体で討論した。

学術シンポジウム



郷土史研究会員ら多くの住民が参加した＝県立図書館宮古文館

川平成雄さん

赤嶺政信さん

狩俣繁久さん

高良倉吉会長

宮古毎日新聞　1999.10.3（日）

”方言は八重山に系統“

琉大が多良間を調査　中間報告、討論会開く

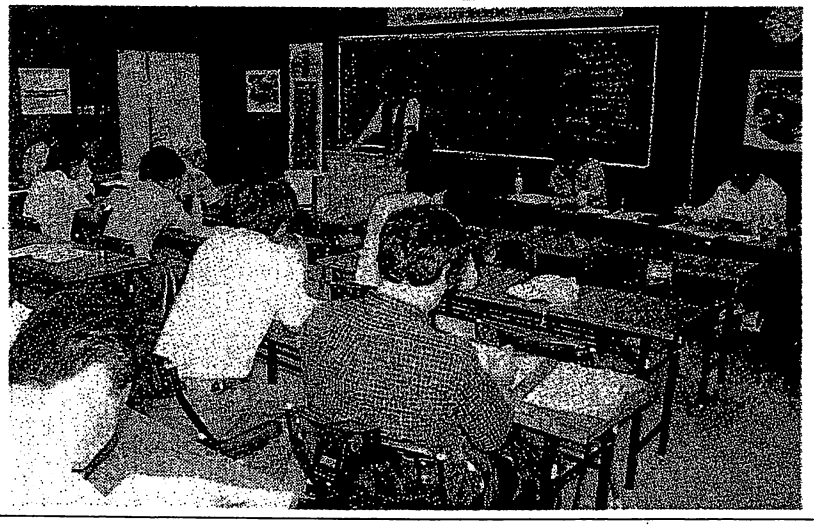
一九九七年から三年間にわたって多良間村の歴史・文化を調査してきた琉球大学法文学部の調査団が二日、県立図書館宮古分館で調査の中間報告会（多良間学術シンポジウム、主催・同学部、宮古郷土史研究会）を開いた。高良倉吉教授ら同大の教授及び助教授らが参加した。この中で狩俣繁久助教授は「系統的な関係を重視すれば、従来は宮古諸方言の下位方言とされてきた多良間方言は、八重山諸方言に位置付けるべきだ」と問題提起した。

シンポジウムは「多良間を考える―歴史・文化・社会の観点から」をテーマに開催。高良教授が「多良間島の歴史的特質」、狩俣助教授が「多良間の言語的特質」。また川平成雄教授が「近代多良間の生産」、赤嶺政信教授が「多良間の文化的特質」のタイトルで調査結果を報告した。

このうち狩俣助教授は多良間方言について「発音の観点から宮古諸方言に近い印象を与えるが、こうした特徴は新しいもの。語形などからすると八重山諸方言がその後に変化したものと推定される」と述べた。

高良教授は、多良間村の親里家に伝承されている首里王府からの辞令書を証拠とし、「十七世紀三〇～五〇年代において多良間統治の役職には地元住民が就任していた」と報告した。

研究報告のあと、会場では地元の郷土史研究家たちを交じえ、活発な意見交換が行われた。



琉大法文学部の教授らが多良間村の調査研究の中間報告を行った＝県立図書館宮古分館